

研究論文

外国語としての日本語 (JFL) の語用論的能力に関わる 基礎的言語知識

中国語を母語とする日本語学習者を例に

木山 幸子* 玉岡 賀津雄† 趙 萍‡

外国語としての日本語 (JFL) の語用論的能力に影響する基礎的言語知識の影響を探るために、中国の大学で日本語を専攻する 224 名の学生に対して各種のテストを実施した。文法知識と語彙知識が語用論的能力に影響するというモデルを構造方程式モデリング (SEM) によって解析した結果、語用論的能力に有意に影響するのは語彙知識であることが示された。さらに重回帰分析で検討した結果、語彙知識の中でも動詞と名詞の知識が語用論的能力に有意に影響していることが示された。実際のコミュニケーションの場における複雑なやりとりに適切に対応するためには、豊かな語彙知識を培う必要があることがうかがわれる。

キーワード：JFL の語用論的能力，発話行為理論，構造方程式モデリング (SEM)，
中国語を母語とする日本語学習者，語彙知識

対人コミュニケーションにおいて発せられた言葉にどのような意図があるかを文化的慣習や規範に照らし合わせて推論する能力を、語用論的能力 (pragmatic competence) という (e.g., Holtgraves, 2002; Searle, 1975; 清水, 2009)。日常のやりとりでは、話し手が発した言葉の字義通りの意味とその発話の意図は、必ずしも一致しない。Austin (1962) やそれを発展させた Searle (1969) の発話行為理論 (speech act theory) は、このギャップを充たす推論プロセスを説明する枠組みを提案している。彼らは、実際の言語運用は何らかの行為をするものとみなし、それが成功裏に遂行されるための要件として適切性

条件 (felicity conditions)¹ が満たされる必要があると説く。話し手は、この適切性条件に基づいて聞き手側の推論に頼ることによって、間接的に発話行為を遂行することができると思われる。

それでは、外国語環境にある日本語 (以下、JFL) の学習者は、こうした語用論的能力をどのように習得するのだろうか。外国語および第二言語の語用論的能力には学習者の母語における語用論的慣習が転移すること (pragmatic transfer) は、様々な発話行為において示されている (e.g., Al-Issa, 2003 は断り; Beebe & Takahashi, 1989 は不同意; Blum-Kulka, House, & Kasper, 1989 は依頼と謝罪; Yu, 2004 はほめに対する返答)。そしてこの転移は、目標言語が話されている環境にある学習者に比べ、外国語環

* 名古屋大学大学院国際言語文化研究科,
E-mail: ZUA04776@nifty.com

† 名古屋大学大学院国際言語文化研究科

‡ 麗澤大学言語研究センター

1 適切性条件は、命題内容 (propositional content), 準備 (preparatory), 誠実性 (sincerity) 及び本質 (essential) の 4 条件から成る。